

多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を 追求する子どもの育成

－「感動」を大切にしたい図画工作科授業の創造－

奥 俊明 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Nurturing children who enjoy the joy and enjoyment of diverse expression and pursue their own expression:
Creation of drawing and arts lessons that value "impression"

OKU Toshiaki

キーワード：感動、造形的な意味や価値、身体化、思考の構造化、発想・構想

1. 実践の目的

1.1. はじめに

「もし、目の前にボールが落ちていたらどうするか。」

私なら、何も考えず元のあった場所に片付けるだろう。大人として、教師としての行動である。それに対して、幼児はどうするであろうか。「うわあ。」と歓喜の声をあげて、一目散にボールに向かって走っていく。そして、楽しそうにボールを投げたり蹴ったりして夢中になって遊ぶ。この姿には、感覚的に物事を捉え、活動を楽しむ姿を読み取ることができる。「野生の本能」が出ているのかもしれない。

図画工作科は、このような感覚的な行動を大切に、野性的に対象に働きかけることを認めてくれる教科であると考えられる。

だからこそ、図画工作科の授業を行う教師は、理性と感性のバランスを取りながら、子どもたちの野生の本能を引き出し、夢中になって造形活動に取り組めるようにする必要があると考える。

そこで要となるものは「感動」だと考えている。子どもが対象に歓喜し、興奮し、魅了されるような「感動」を味わいながら、創造的に学習を進めていくことのできる授業を目指し、日々取り組んでいる。本テーマの「感動」は、抽象的な言葉であり、明確な定義はないが、日常には、大なり小なり感動する要素がたくさんある。そこで、本実践は、感動を味わうことができるように日々の授業に具体化していく過程を報告する。

1.2. 実践の背景

これまでの実践において、目指してきた「多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する子ども」が備える資質・能力として表1のように設定している（表1）。

表1 多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する具体的な資質・能力

| 知識及び技能 | 思考力, 判断力, 表現力等 | 学びに向かう力, 人間性等 |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 多様な造形環境（材料や場所など）や行為から見いだした造形的な視点を理解するとともに、それらを基に、工夫してつくりだしたり表現したりすること <p>多様な表現及び鑑賞の活動で生かすことができる造形的な視点や技能 (身体化された造形的な視点) (創造的に表す技能)</p> | <ul style="list-style-type: none"> 材料や感じたこと, 考えたことを基に, 想像する力 多様な造形的な視点を基に, 試行錯誤しながら表現の仕方を考える力 多様な造形的な視点を基に, 作品などのよさや美しさを感じ取ったり考えたりする力 <p>自分にとって新しいものやことをつくりだす力 自分なりに新しい見方や感じ方をつくりだす力</p> | <ul style="list-style-type: none"> 自ら「つくり, つくりかえ, つくる」過程を通して, 新しいものや未知の世界に向かう喜びや楽しさを味わいながら, もの・ことをつくりだしていく態度 自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしながら豊かな生活を自らつくりだそうとする態度 <p>表現及び鑑賞を繰り返し, 自ら造形的な意味や価値をつくりだす態度</p> |

表2 これまでの実践における成果と課題

| | |
|----|--|
| 成果 | ○ 各授業で設定した自分なりの造形的な意味や価値となる「自分なりの表現の工夫・対象や事象のよさや美しさ」をつくりだす子どもの姿が多く見られた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ● 対象や事象を多様な造形的な視点で捉えることが、発達の段階に応じて十分にできていない。 ● これまでの学習でつくりだした自分なりの造形的な意味や価値を生かして、他題材等で、さらに自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける姿にまで至っていない。 |

その際、上記表2のような成果や課題が見られた（表2）。

上記の課題の要因を分析すると、教師側が、発達の段階に応じた子どもの造形的な視点の認識の仕方について十分に理解できておらず、一概に学習内容や指導方法を設定してしまい、多様な造形的な視点で捉えさせるまでに至っていないと考えられる。

また、各題材において自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしている姿は見られるものの、教師側が、それらの意味や価値をつくりだしていることを実感させられておらず、他題材等に生かし、より豊かな表現を追求し自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけようとする主体的な姿にまでは高めさせられていないと考えられる。

1.2. 実践の方向

本実践は、先の2つの課題を解決し設定した資質・能力を育むことができるようにするために、まず、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感している子どもの姿を明確にする。そして、そのような姿に迫るために、どのような学習内容設定や指導方法が必要なのかを明確にして実践につなげたい。

これまでの実践から、「自分なりの造形的な意味や価値」を、「自分なりの表現の工夫・対象や事象のよさや美しさ」と定義した。対象や事象とは、造形要素・原理を含んだ人・もの・ことであり、それらを、発達の段階に応じて、感性や想像力を働かせながら多様な造形的な視点で捉えることになる。そして、自分なりのイメージを膨らませ試行錯誤を繰り返す中で、対象や事象がもつ特徴や

面白さに気付き関わりを深め、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていくと捉えている。

このような様相の中で実感を伴うようにするためには、「感動」する体験が大切であると考え。その「感動」の様相や、どのような学習内容設定の考え方が大切なのかを明らかにする。

その際、図画工作科における知識の要となる造形的な視点を、子どもがどのように認識し理解していくのかを発達段階ごとに明確にすることで、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感している子どもの姿が具体化され、学習内容が学年に応じたものになると考える。

以上のような研究の方向を基に、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感する経験を積み重ね、自ら子どもが学習間のつながり等を見だし、自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけることができる学習内容設定や指導方法の在り方を考える。そして、目指す資質・能力を育むことができるようにしていく。

このことから、本研究主題と副題を以下のように設定した。

「多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する子どもの育成—「感動」を大切にした図画工作科授業の創造—」

2. 実践の内容

2.1. 「感動」を大切にした図画工作科授業とは

自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感するためには、諸感覚を基に自分事として感じる事が大切である。その際、図1のように自分の造形活動に向き合い振り返りながら、美しさに魅了されたり、対象や事象の面白さに興奮したり、作りだしたことに歓喜したりするといった「感動」を味わっていくことが大切であると考え。

なぜなら、魅了・興奮・歓喜といった感動を味わうことで、感情や感覚を伴って心が強く動かされ、対象や事象の造形的なよさを、諸感覚を基に自分事として感じ取り、実感を伴った経験として積み重ねていくことができるからである。

そして、実感した経験を積み重ねることは、自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける原動力になり、目指す子ども像の育成につながると考える。

よって、「自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感する子どもの姿」とは、「対象や事象を手や体全体の諸感覚を基に造形的な視点で捉え、魅了・興奮・歓喜するといった感動を味わい、それらに向き合い振り返る中で、自分なりの表現の工夫・対象や事象のよさや美しさをつくりだしている姿」と考える。

例えば、図1を基に子どもの姿で説明すると、活動中や友達との鑑賞活動の中で、落ち葉を形という造形的な視点で捉えるとき、「見て見て！細長い形もあれば丸い形もあって、いろいろな形をしていて面白いよ！何だか顔の形に見えてきたな。」、また、色という造形的な視点で捉えるとき、「新しい発見があったよ！同じ緑でも濃さが違ったり、時には、黄色の葉っぱもあったりして、いろいろな色があつてすごくきれいだな！」といった姿が考えられる。

これらの姿には、自分の造形活動に向き合い振り返りながら葉の形や色の多様さへの気付きに興奮し、自分なりに対象や事象のよさや美しさをつくりだし魅了されている様相がある。そして、顔

の形と似ているから落ち葉を使って顔を表現しようとイメージと関連させながら表現を工夫し、つくりだしたことで歓喜する様相が含まれている。

その際、子どもの対象や事象への認識の仕方は発達に応じて特徴が見られる。つまり、造形活動において形や色などの造形的な視点の認識の仕方について、発達の段階を捉え、実態を把握していくことが大切であると考える。

さらに、図画工作科において、思考の場面として、主に発想・構想場面（イメージをもつ）がある。この場面における子どもの思考を明確にし、学習内容に応じて思考の構造化を図ることで、教材の内容や教師の働きかけが具体化できると考える。そのことで、学習内容のよさや面白さを子どもが実感し、感動につながると考える。

これらのことを踏まえ、子どもたちが自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感できる経験を積み重ねていけるようにするために、本実践は、次の視点から授業創造の研究を進めることとした。

- 視点1 発達の段階に応じた造形的な視点を認識し、理解していく子どもの姿の明確化
- 視点2 自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感する学習内容設定
- 視点3 発想・構想場面における子どもの思考の構造化

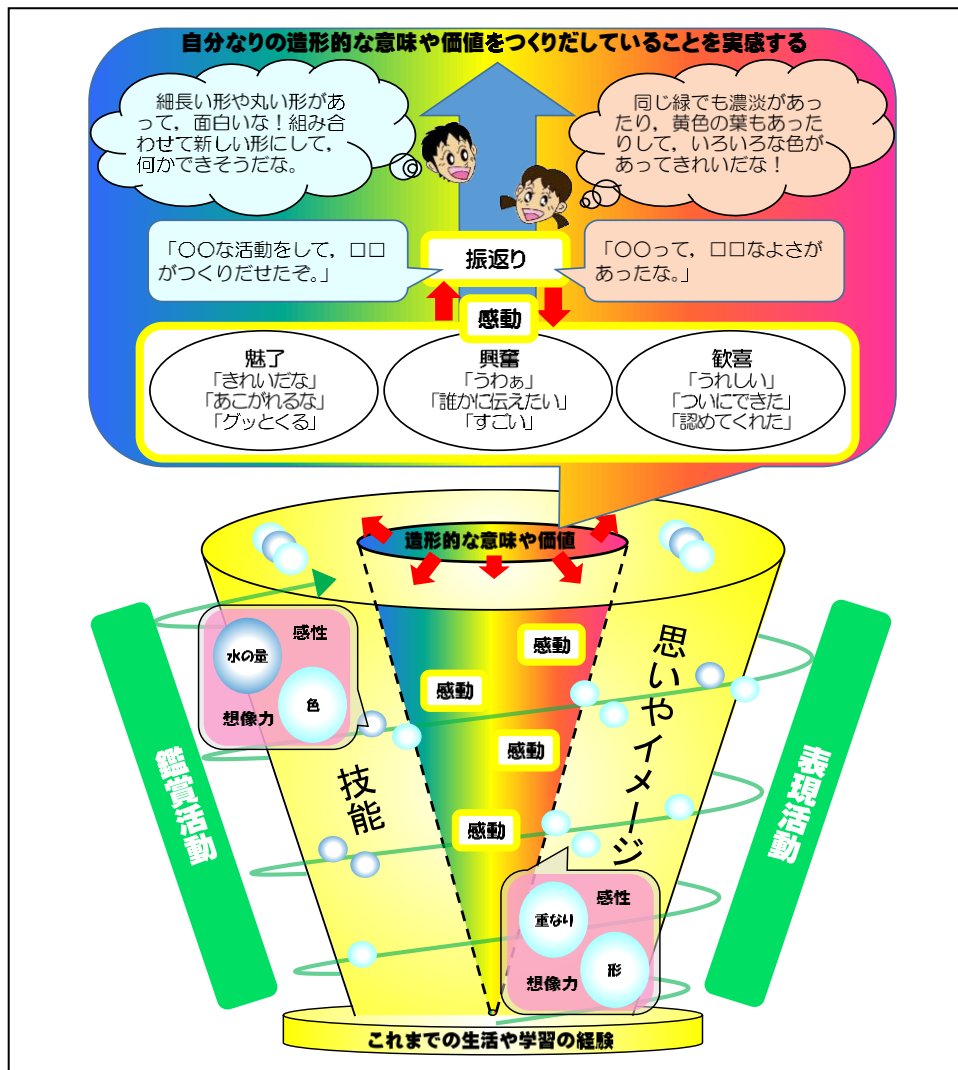


図1 感動を伴いながら自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける過程

2.2. 「感動」を大切にしたい図画工作科授業の基本的な考え方

視点1 発達段階に応じた造形的な視点を認識し、理解していく子どもの姿の明確化

図画工作科の題材で設定される対象や事象に対して、子どもの捉え方はそれぞれの感性によって多様にある。そのため、知識となる造形的な視点の理解の内容には中心となるものはあるが、多様な気づきが生まれる面白さもある。よって、各題材において具体的な学習内容を設定していくためには、学びの主体である子どもが発達の段階に応じて対象や事象に含まれる造形的な視点をどのように認識し、理解していくのかを捉えた上で設定する必要がある。

そこで、発達段階に応じた対象や事象の認識の仕方を図2のように整理した(図2)。

そして、図2を基に、子どもがどのように造形的な視点を認識し、理解していくのかを、低・中・高学年の【気付く・分かる・理解する】姿を以下の図3ように具体化した(図3)。

その際、人の発達や経験を重視することから、幼児教育・美術教育とのつながりを踏まえて整理している。

ただし、形式的に、低・中・高学年と分けられるものではなく、高学年の「理解する」は、「気付く」や「分かる」の延長線上にあるとともに、「気付く」「分かる」を含んでいる姿であると捉えている。

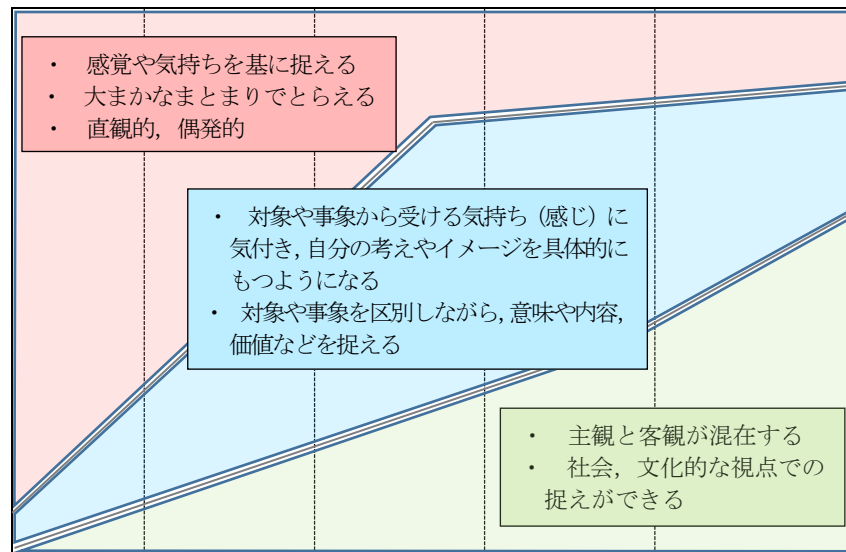


図2 発達段階に応じた対象や事象の認識の仕方

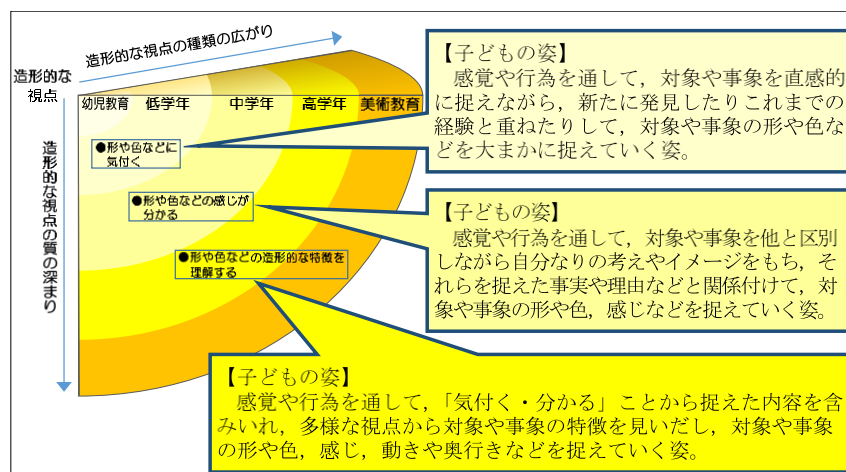


図3 造形的な視点への「気付く・分かる・理解する」具体的な子どもの姿

視点2 自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感する学習内容設定

これまでに述べてきたように、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感するためには、発達の段階に応じた造形的な視点の認識とその理解を図りながら、感動を味わうことができるようにすることが大切であると考えます。

そこで、子どもが学習を通して魅了・興奮・歓喜といった感動を味わうことができるような学習内容を設定するために、先行研究を基に、以下のような状態が必要であると整理した。

- A 「興味・関心があること」「意外・予想外なこと」「今までにない経験であること」「感情移入・共感できること」「人情に関すること」
- B 「その事柄に没頭していること」「一生懸命な姿」「周囲に同じ状態の人がいること」「通常ではできないこと」
- C 「努力・苦勞の成就」「期待・希望が実現すること」

これらの状態を図画工作科の学習過程に置き換え、以下の①～④のように整理した。

- ① 意外性のある対象や事象に出合い、子どもの興味関心を高めこと
- ② 自分なりのストーリーをもち、これまでの経験知と関連させながら見通しをもって活動を想像できること
- ③ 周囲の友達等と共感しながら、造形活動に没頭できること
- ④ 自分の造形活動を振り返り、つくりだした喜びを味わい、さらなる造形意欲をもてること

このような学習過程となるようにするために、図画工作科の主な学習内容設定の要素である「テーマ・活動・材料、用具、場所」を基に学習内容の要件を整理すると以下ようになった。

要件1：造形活動に思いを高め、自分なりのストーリーを想像できるテーマ

要件2：経験との関連、もしくは、意外性がある材料・用具・場所

要件3：自己・他者との対話が生まれ、夢中になって取り組める活動

これらの感動を喚起する学習内容の要件を基に、具体的な題材を設定する。

視点3 発想・構想場面における子どもの思考の構造化

図画工作科において、表現と鑑賞は一体的ではあるが、主な思考方法として、表現の際は主に創造的思考が働き、鑑賞の際には、主に論理的思考が働くと考える。そして、それらの思考方法には、「比較する・関連付ける・分類する・類推する」といった多様な考えるための技法がある。そこで、発想・構想場面において、どのような視点に着目してどのような考えるための技法を活用するかを構造化して指導案等に示すことで、授業がより具体化できると考える。

鑑賞・表現における主な思考の流れを図4のように整理した(図4)。

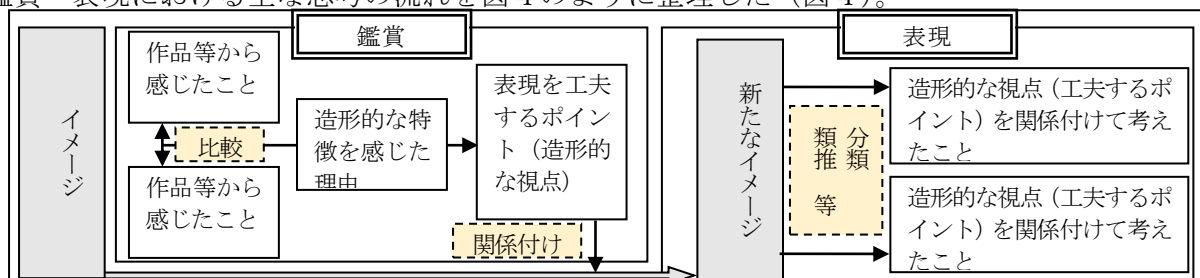


図4 発想・構想場面における子どもの思考の構造化図

3. 実践の具体化

3.1. 第6学年「みんなでコマ撮りアニメーション」(工作)における授業実践

実践の視点との関連

視点1「発達の段階に応じた造形的な視点を認識し、理解していく子どもの姿の明確化」については、高学年であることから、「感覚や行為を通して、『気付く・分かる』ことから捉えた内容を含みいれ、多様な視点から対象や事象の特徴を見だし、対象や事象の形や色、感じ、動きや奥行きなどを捉えていく姿」である。

題材における具体的な姿として、「アニメーションの制作や鑑賞を通して、動きや変化という視点から、アニメーションの特徴を見だし、部品の形や色、大きさ、配置、動かし方といった造形的な視点を捉えていく姿」が考えられる。つまり、動きや変化が生まれる理由を明確にしながらか造形的な視点を認識し、理解していく子どもの姿を目指すことになる。

視点2「自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることを実感する学習内容設定」については、

要件1：造形活動に思いを高め、自分なりのストーリーを想像できるテーマ

「1年生が喜ぶ物語を、動きや変化をつくりだしながら、コマ撮りアニメーションに表そう。」

要件2：経験との関連、もしくは、意外性がある材料・用具・場所

・絵本とは異なる動きや変化があるアニメーション制作、iPadの使用

要件3：自己・他者との対話が生まれ、夢中になって取り組める活動

・ペアでの制作、試作活動の設定

視点3「発想・構想場面における子どもの思考の構造化」については、本時の実際で具体的に述べる。

題材の位置とねらい

本題材は、部品の配置や動かし方などを工夫し、粘土等で表現した場面をコマ撮りして、そのつながりから生まれる動きや変化の面白さを生かして、アニメーションをつくる工作の題材である。

本題材では、部品の形や色、配置や動かし方等の造形的な視点で、表現を比較したり、自分のイメージと関係付けたりしながら、アニメーションを表現していく活動を通して、イメージした場面をコマ撮りしながら表現したいという意欲を高めていくことをねらいとしている。また、アニメーションの構成を部品の形や色、配置や動かし方等の造形的な視点で捉え、動きや変化のある様子を発想・構想したり、友達の作品の工夫や面白さに気付いたりして、新たなイメージをつくりだす力や対象や事象のよさや面白さを味わう力を培おうとするものである。さらに、イメージに合わせて粘土やiPad等の材料や用具を適切に扱う技能を高めることをねらいとしている。

指導の基本的な立場

本題材で扱う小麦粉粘土は、着色がよく、粘土を練り込み混色することができるため、自分の思いに合わせて表現しやすい材料の一つである。また、iPadのiMotionというアプリは、撮った画像をコマ送りすることができたり、画像を挿入・削除したりすることができ、多様な表現方法を試行

することができる。これらの材料や用具を活用することで、動きや変化を生かしたアニメーションを表現する楽しさを味わいながら、意欲的に取り組む活動を展開していくことができると考える。

具体的には、まず、コマ撮りアニメーションをつくることへの思いを高めるために、子どもの関心のあるコマ撮りアニメーションを鑑賞させ、面白さについて話し合わせ、目的・相手意識を明確にした題材のめあてを設定する。そして、コマ撮りアニメーションに含まれる造形的な特徴を見いだしながら表現の見通しをもつことができるようにするために、教師が示すコマ撮りの作品や自他の作品を比較し、感じたことやその理由から見いだした新たな造形的な視点をまとめる。次に、イメージしたストーリーを具体的にアニメーションに表現することができるようにするために、見いだした造形的な視点とイメージとを関係付けながら表現させたり、できた作品を互いに鑑賞し合い、よさを交流させたりする。さらに、終末の鑑賞においては、これまでに気付いてきた造形的な視点を基に、できた作品を全体で鑑賞し、それぞれの作品の価値を認め合えるようにする。

子どもの実態

知識及び技能

- ・ アニメーションを工夫する視点への気付きについては、部品の形や色の工夫や、写真を撮る角度などに気付いている。
- ・ 配置や動かし方等の多様な造形的な視点を見いだすまでには至っていない。
- ・ 粘土の適切な使い方については、取扱い後の行動において認識が十分ではない点があった。

思考力、判断力、表現力等

- ・ 動きや変化を生かした物語の発想については、登場人物を工夫するなど、多様な物語が発想されていた。
- ・ 本題材の特徴である「動きや変化」を工夫した内容があまり見られない。

学びに向かう力、人間性等

- ・ 多くの子どもが、アニメーションづくりを好意的に捉えている。

題材の目標

【知識及び技能】

- ・ コマ撮りアニメーションの仕組みや部品の形や色、配置や動かし方等の造形的な視点を理解することができる。
- ・ 自分の表したいことと照らし合わせながら、登場人物等を材料の特徴を生かしてつくったり、ICT機器での画像の撮り方を工夫したりすることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

部品の形や色、配置や動かし方等を視点にして、場面をイメージしたり、友達のよさに気付き自分の表現に生かしたりすることができる。

【学びに向かう力、人間性等】

コマ撮りアニメーションの仕組みに興味をもち、動きや変化を生かして表現する面白さに気付き、進んで表現することができる。

本時（2 / 8）

【本時の目標】

コマ撮りアニメーションづくりに興味をもち、動きや変化をつくりだすための造形的な視点（工夫するポイント）について話し合う活動を通して、部品の配置や動かし方といった造形的な視点を基に、動きや変化をつくりだしアニメーションを考え、アイデアスケッチに表現することができる。

【実際】



図5 本時の実際

3.2. 授業実践の考察

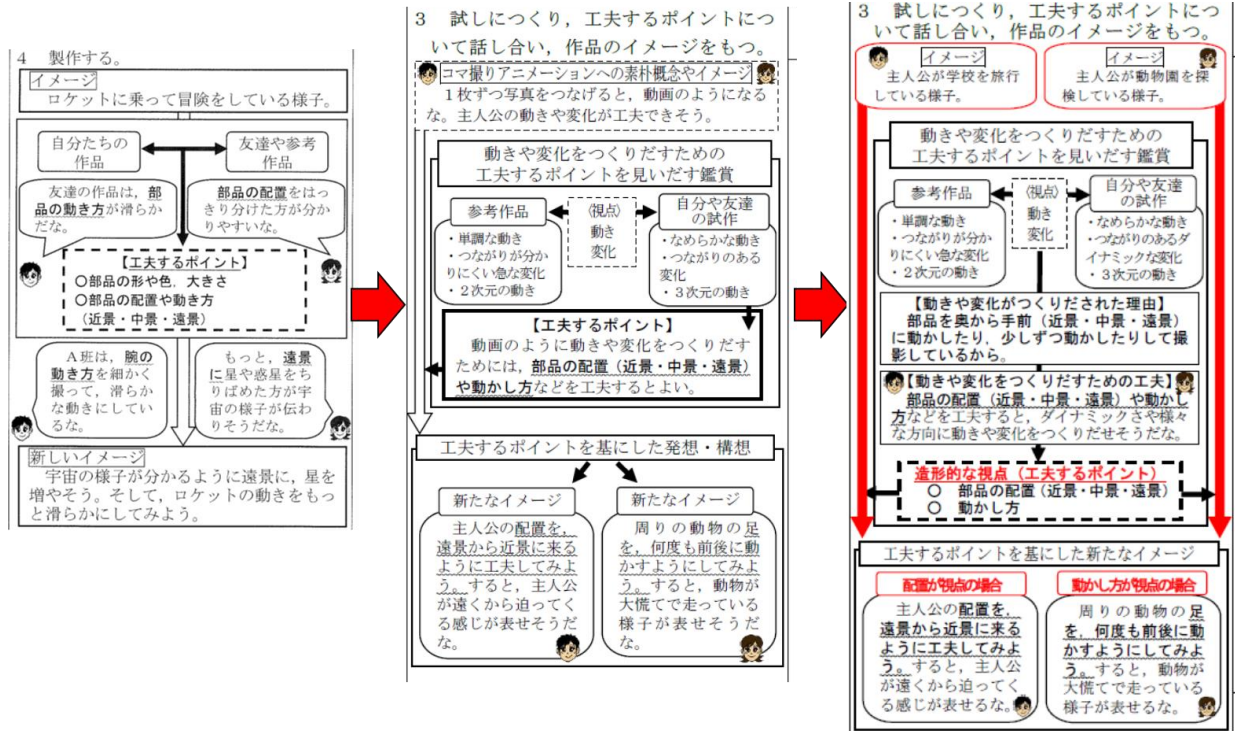


図6 発想・構想場面の変容

日々の授業において、「感動」を大切にしながら授業における発想・構想の場面に焦点化した授業改善を図ってきた。学習内容設定において、要件を整理したことで、目的・相手意識が明確になった活動となり、意欲的に試行錯誤を繰り返しながら表現や鑑賞の活動に取り組む姿が見られた。また、発想・構想場面における子どもの思考の過程を再度検討し、上記図6にあるように、指導案での修正をしていった(図6)。具体的には、参考作品の内容や、発問の仕方を工夫した。これまでは、鑑賞させながら「何か気付いたことはありますか。」といった、事実を捉えさせることに終始していた。しかし、子どもにどのような視点でどんなことに気付かせたいかを構造化したことで、「どんなことを感じますか。(感性に働きかける発問)」「それはどこからどのように感じましたか(知性に働きかける発問)」といった発問を工夫することができた。結果、理由を分析し、新たな造形的な視点を子ども自身で整理することができ、さらに意欲的に造形活動に取り組むようになった。今後は、このような姿を、実践テーマにあるように、自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけていけるように、振り返りの場面に焦点化しながら、発問や学習活動を工夫していく必要があると考える。

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、図画工作科において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。